

2021年7月18日

大井バプテスト教会

説教題 『ささやかな聖所』 となった神」 エゼキエル書 11章16～20節

主任牧師 加藤 誠

「確かに、わたしは彼らを遠くの国々に追いやり、諸国に散らした。しかしわたしは、彼らが行った国々において、彼らのためにささやかな聖所となった。」(エゼキエル書 11章 16節)。

大井教会の聖書日課ではいまエゼキエル書を通読しています。エゼキエル書は分かりにくい難解な表現が多く、読みやすい書物ではありません。けれども、先週、ふと目に留まり、心の中で何度も反芻したくなる御言葉と出会いました。それが今ご一緒に読んだ 11章 16節の「わたしはささやかな聖所となった」という御言葉です。バビロン捕囚により異国の地に散らされたイスラエルの民のために、神さまは預言者エゼキエルを通して、この御言葉を語りかけられたのでした。

「聖所」とは「神さまがそこにおられ、私たち人間が神さまと出会うことができる礼拝場所」のことです。イスラエルの人々にとってはソロモン王が建造したエルサレム神殿がその「聖所」でした。人々は「このエルサレム神殿にこそ、主なる神はおられる」という信仰において、動物の犠牲をささげ、大いなる賛美をもって礼拝したのです。390年もの長い間、エルサレム神殿は守られてきたので、「この神殿にこそ神は住まれ、祝福を注ぎたまう。この神殿がある限り、敵国にも侵攻され負けることはない！」という「神殿不滅神話」まで生まれたのでした。

ところがバビロニア帝国の度重なる侵攻により、もろくも「神殿不滅神話」は崩壊します。異教徒の地、バビロンに捕え移されたエゼキエルたちは「神さまがここにいてくださり、神さまと出会うことのできる聖所」を失った深い悲しみに覆われ、信仰の危機の中にありました。捕囚民の立場では新たな聖所建設などもってのほか。動物の犠牲をささげることも、大きな声で賛美をすることもゆるされません。せいぜいできたのは、みんなで河原などに集まり小さな声で祈りをささげること。それまで「エルサレム神殿で犠牲をささげるのが正統な礼拝」という教えが強烈にインプットされていた人々にとっては「神さまに犠牲も賛美もささげられない礼拝など、礼拝とは言えない。もう神さまに目を注いでいただくこともできない」という思いに打ちのめされていたようです。

その彼らに主なる神は「わたしがささやかな聖所となる」と語りかけられました。この「ささやかな」とは「わずかばかり」という意味の言葉なのですが、それを時間的な意味に受け取って「わずかの間 (for a little while)」と訳している聖書と、空間的な修飾語と理解し「ささやかな聖所 (a little sanctuary)」と訳している聖書と二通りあるようです。前者の理解でいえば、主なる神がバビロンで「聖所」となられるのは「わずかの間」であり、その後は「再びエルサレム神殿が復興されてそこで礼拝できるようになる！」という希望が暗示されていることになり、後者の理解、つまり新共同訳の翻訳では「エルサレム神殿のような立派な神殿ではないけ

れど、神ご自身が小さな、ささやかな聖所となって、あなたがたと共に歩んでくださっている！」という意味になるでしょうか。

わたしは新共同訳の「ささやかな聖所」という言葉が、今コロナ禍を歩んでいる私たちのために語られているような気がして慰めを覚えました。今、私たちは共に集って礼拝することができず、ほんとうにもどかしい思いを一年半近く重ねています。しかし、私たちが散らされているそれぞれの場所に、その日常の中に、隣人との関わりの中に、主なる神さまは共に歩み、「ささやかな聖所」となってくださっている。私たちが日々生かされている、その場所に神さまと一緒に歩んでくださって、その場所が神さまの語りかけを聴き取り、神さまを礼拝し、神さまとつながる場所となるよう働いてくださっているのです。

考えてみると、主イエスという方は私たちの間で「ささやかな聖所」となってくださった方です。エルサレム神殿の礼拝から排除されて、「お前は、神さまの慈しみをいただけない」と祝福を否定されていた一人ひとりの傍らにそっと寄り添い、その悲しみと憂いを引き受け、執り成し祈り、一緒に歩んでくださった主イエス。主イエスが「ささやかな聖所」となって、一人ひとりのところに来て下さり、神さまの愛とつなげてくださったので、私たちはいつでも、どんな場所でも、祈りと賛美をもって神さまを礼拝することができるようになったのです。

ある福祉施設で働いておられる方のブログを読みました。人の着替えや排せつ、食事に関わる仕事をされている方のようなようです。人として生きるために必要な日常の行為ですが、身体に障がいをもった方々の身の回りのお手伝いをする時、時間に追われたり、疲れの中で、愛のない受け答えをすることがほんとうに多くある。油断すると見過ごしにしてしまうような、愛のなさにこそ、自分の罪深さを示されるし、「ささやかな愛し合いこそ最も尊く、最も難しい」と思わせられている。主イエスが弟子の「足を洗う」という具体的な行為に「愛する」ことを込められ、教えられた理由を感じさせられている、と。

この方のブログを読みながら、私たちが人と人との「ささやかな日常」の関わりの中に「ささやかな愛」を込めていく大切さを教えるために、主イエスは「ささやかな聖所」となってくださったのだなあと思えて考えさせられています。

私たちは、いま新しい礼拝堂を与えられようとしています。この礼拝堂で共に御言葉に聴き、心から賛美をささげて、神さまが今、確かに生きて働いておられること、主イエスがあらわされた神の愛こそ、私たちの拠りどころであるという福音の恵みを一緒に受けていくことができるようにと願います。

と同時に、私たちそれぞれの日常の歩みの中に、「ささやかな聖所」となって共に歩んでくださっている神さまを大切に受けていきたいのです。神さまからいただく「新しい霊」は、私たちの中から石の心を取り除き、やわらかな肉の心を与えてくれる霊です。日々「新しい霊」をいただいて、「ささやかな日常」の関わりの中に「ささやかな愛」を込めていくことができますように。